

## 報告

### 『映画 太陽の子』上映会

徳田悠希、中村涼香

#### 概要

12月19日、グローバル・コンサーン研究所の主催で『映画 太陽の子』の上映会とトークイベントを開催しました。この映画は、かつて日本に存在した「原爆研究」を取り上げた作品で、俳優の柳楽優弥さん、有村架純さん、三浦春馬さんらが出演していることでも話題となり、全国で上映されています。

この上映会のテーマは「映画のレンズを通して今を見る」。同世代の大学生と核兵器問題を考えるために、総合グローバル学部の中村涼香（大学3年）と徳田悠希（大学2年）が中心となって実行委員会を立ち上げ、企画したものです。トークイベントには、黒崎博さん（監督）、浜野高宏さん（プロデューサー）、中村涼香（上映会実行委員・司会）、徳田悠希（上映会実行委員）が登壇しました。

映画の主人公は原爆開発に携わった若い科学者です。黒崎監督は、科学者と核兵器を私たちの社会に照らして、こんな発言をされました。「ある科学者と対話した時、彼が『一本の木で表すと、自分たち（科学者）は幹なんだ。伸びた先にある枝葉を社会は利用している。それが遺伝子組み換え食品であり、放射線の医療における利用であり、核兵器でもある。科学者は、それら全てに責任を持つことはできない』と言った。その是非はともかく、一度できたものは止められない。そして断罪できない。それが脈々と続き、未来も続いていくのだろう。」

その枝葉の善悪を判断していくのが、これから生きる私たちの役割であると感じるトークセッションとなりました。

日曜にもかかわらず学内約30名の参加があり、芸術作品をアカデミズムと社会変革のムーブメントにつなげて捉える視点がユニークな会となりました。

#### 感想

普段の日常生活の中で、硬派とみなされがちな核兵器や安全保障のトピックについて友人らと話しをする機会はほとんどありません。しかし、1万3000発の核兵器が存在する世界に生きている私たちは、核兵器が使われたら何が起きるのか、ということに、より注視すべきなのではないかと常々考えていました。言葉だけでは伝えることのできないこの危機感を映画というエンタメ作品は観客に伝えることができます。本作品はさらに踏み込んで核兵器を作る、持つということが何を意味するのかを提起し、映画を視聴した参加者は様々なことを感じ取りつつ、核兵器への危機感を会場が一体となって共有していたように

思います。エンタメ作品の力を実感し、学校でこのような場を設けることができたことを大変嬉しく思います。ご協力いただいたグローバル・コンサーン研究所の皆さんには心より感謝すると共に、ぜひ今後ともこのような時間を一緒に作っていただけたらと思います。ありがとうございました。（中村涼香）

核兵器の問題に向き合う中で、その関心の持ち方は「広島、長崎との出会い」か「安全保障」の二通りで、それぞれの温度感の差を縮める突破口を探る日々でした。今回、映画を切り口に、核兵器の問題はもちろん、私たちの未来をどう選択していくかという視点が加わったことに大きな意義があると感じています。善と悪には明確な区別がなく、私たちは問題に出会う度に迷いながら選択していくのだと思います。それでもその判断軸は、「自分と、誰かの未来を傷つけない」ことに置いて、行動をしていきたい。そんな気持ちを新たにすることができました。最後になりましたが、映画上映の機会を下さった映画関係者のみなさま、そしてグローバル・コンサーン研究所のみなさまに深くお礼申し上げます。（徳田悠希）

徳田悠希（上映会実行委員・総合グローバル学部）

中村涼香（上映会実行委員・総合グローバル学部）